

北杜夫の作品におけるユーモアについて  
—その源泉を探る—

長岡 壽 男\*

大阪青山学園理事

Humor in Morio KITA's works  
— A search for the sources of his humor—

Hisao NAGAOKA

Osaka Aoyama Gakuen

**Summary** Morio Kita was born as the second son of Mokichi Saito, a great Tanka poet, and his wife Teruko. He grew up in a wealthy family, received college education to become a medical doctor after some turns and twists, and then entered his career as a writer. He won Akutagawa Prize at an early stage of his writer career and continued to produce numerous works thereafter. His works are rich in humor, which attracted a great number of readers.

In this paper the author attempted to analyze his works and search for roots of his humor. Humorous features of his works were characterized and categorized in the last chapter. It seems clear that his sense of humor was nurtured by his lifelong self-education driven by his intellectual enthusiasm.

**Keywords:** Morio KITA, roots of humor, lifelong education, intellectual curiosity

はじめに

『どくどくマンボウ航海記』（以下航海記）、『夜と霧の隅で』などで有名な小説家北杜夫は、その類まれな才能から、人々の心を惹きつけることとなり、これまでに多数の論評がなされている。

筆者の本欄にも1960年頃に刊行された文庫本なども含め、これまでに愛読してきた北杜夫作品がずらりと並び、その数は数十冊にも及ぶ。北杜夫の小説の魅力とは、どのようなものなのか一言で述べるには難しいが、マンボウ・シリーズやその他の小説のなかで、しばしば語られるユーモラスな表現がその要因であるのかもしれない。北杜夫作品に溢れるユーモアは、どのようなところから生まれ、何を題材にして表現され、何に依存しているのだろうか。本稿では、多数の作品の中から共通しているものについて整理し、その源泉を探ることにした。

ところで、ユーモアとはいかなる意味があるのか、広辞苑で引いてみると、「上品な洒落、おかしみ。諧謔（おもしろみのある戯言、おどけ）」とある。したがって、ユーモア作品とは、「作品のストーリーや主人公などの会話・行動に関して、ユーモアを伝えるところが際立っている」ことになる。また、阿刀田高は『ユーモア革命』のなかで、「ユーモアは笑いと結びついているが、軽く上品な笑いであり、爆笑ではない。考え方やものの見方の違いにより、普通ではないことを感知する心理と結びついている。人間の性格からにじみ出るようなもの、体液のようなものといえる。したがって、その人が育った環境や教養とかかわりが深い。これは一朝一夕で身に付くものではない」<sup>1)</sup>と述べている。

このことを踏まえて、本稿では、マンボウ・シリーズに限らず、小説や他の作品についても参考にして、同氏の作品におけるユーモアの源泉を探索してみたい。本稿の構成は、第1章では北杜夫の経歴と発表さ

\*Email: hisao@sakura.zaq.jp  
〒562-8580 箕面市新稲2-11-1

れた作品について、筆者が読了した範囲で分類・整理を試みている。特に、筆者の私見により代表的な小説とエッセイについて3点ずつ取り上げ、それぞれの作品を分析する。第2章では、北杜夫のユーモアの源泉が何処にあったのか、多数の作品を参考にしながら、気づいたことや考えを整理する。最後に、本稿のまとめとして、北杜夫のユーモアについて私見を述べる。なお、本稿では、北杜夫の多数の作品群のほか、実兄の斎藤茂太<sup>2)</sup>、長女の斎藤由香<sup>3)</sup>、親友の辻邦生<sup>4)</sup>各氏の作品なども参考にしている（本文中で記した参考文献は、すべて文末に記した）。

## 第1章 北杜夫の経歴と作品

### 1-1 北杜夫の略歴

北杜夫（本名 斎藤宗吉）は、1927年（昭和2年）、東京都赤坂区青山南町5丁目に、父斎藤茂吉、母輝子の次男として生まれた。父はアララギ派の国民的歌人としても知られており、青山脳病科病院院長を務めた。母は、青山脳病科の創立者斎藤紀一の次女であった。なお、兄弟には、兄の斎藤茂太と、姉、妹がそれぞれ一人いた。

青南尋常小学校から麻布中学校に進み、四修で旧制松本高等学校受験を試みたが不合格となり、東京帝大臨時付属医専に入学した。しかし、旧制高等学校への想い断ち難く、再度受験に挑戦するため麻布中学5年にもどり、翌年（昭和20年）、松本高等学校を再び受験したが、今度は合格している。

動員先の軍需工場で終戦を迎えたが、その後の高校生活で生涯の師や友を得ることになる。望月市恵教授<sup>5)</sup>からトーマス・マン<sup>6)</sup>の魅力を学び、辻邦生とはお互いに研鑽を積む間柄で生涯の友となった。高校生活を満喫したのち、東北大学医学部に進学したが、一方において、詩や小説を書き始めており、同人誌などに投稿を続けていた。

1952年（昭和27年）、東北大学医学部を卒業しインターンを経て、翌年慶応義塾大学医学部神経科教室助手となった。この年2月父茂吉が死去している。1954年『幽霊』を自費出版するなど、次々に作品を発表した。1958年に水産庁漁業調査船照洋丸の船医として欧州方面に出航する。このときの経験を糧に『航海記』を出版したが、1960年（昭和35年）これがベストセラーとなった。さらに同年の『夜と霧の隅で』が、第43回芥川賞を受賞している。また、この年、医学博士の学位を得た。

1961年横山喜美子と結婚、兄の家にそれまで居候

していたが、ほどなく世田谷区の東松原に転居している。1962年長女由香が生まれた。1964年出版の『楡家の人びと』で第18回毎日出版文化賞を受賞。その後『どくとるマンボウ青春記』（以下青春記）など、数々の作品を発表している。1984年（昭和59年）母輝子が死去。1986年には『輝ける碧き空の下で』（一部）、（二部）により第18回日本文学大賞を受賞した。さらに1999年（平成11年）『茂吉評伝4部作』により第25回大佛次郎賞を受賞している。同年、親友の辻邦生が死去した。2011年（平成23年）腸閉塞にて死去、享年84歳であった（注：斎藤國夫作成の北杜夫略年譜参照<sup>7)</sup>）。

### 1-2 北杜夫の作品

北杜夫の作品についての読者には、大きく二派に分かれるといわれる。小説をこよなく愛する人たちと、どくとるマンボウなどのエッセイ・ファンとがいる。これを「幽霊派」と「マンボウ派」と呼ぶ人たちがいる<sup>8)</sup>。しかし、現実には明確に分類できるものでもなく、どちらかの作品に魅せられた人々が、作品名を挙げることから、小説（幽霊）派とかエッセイ（マンボウ）派などと言われるだけのことであろう。筆者は、これまでに読んだ作品をもとに、以下の表1のごとく分類してみた。作品の分類項目としては、小説、子供向け小説、どくとるマンボウ・シリーズ（エッセイ）、その他のエッセイ、旅行記、その他（日記、評論など）とした。小説派かエッセイ派という分け方より、さらに小分類に分けてみた。また、それぞれの愛好者が主張するところも理解できるが、一方がどうということでもなく、それぞれに魅力のある作品があると考えている。

小説についてみれば、『幽霊』のような初期の作品にも魅力を感じるし、芥川賞を受賞した『夜と霧の隅で』のように、北杜夫の作品には珍しい深刻かつ社会性のあるテーマを追求したものがある。筆者の個人的な感想からいえば、『楡家の人びと』、『白きたおやかな峰』と『輝ける碧き光の下で』といった長編に強い思い入れがある。

『楡家の人びと』は、明治、大正、昭和と3代に亘る、ある病院経営者一族の歴史的な流れの中で、一人ひとりがどのように生きたのかを伝えており、この時代を知る上でも参考になる貴重な作品である。各時代の世相を的確に伝えており、時代に翻弄されながらも生きていく家族の姿を克明に語っている。三島由紀夫もこの作品について、高い評価をしていた<sup>9)</sup>。この作

品の執筆に際して、トーマス・マンの『ブッデンブローグ家の人々』から、多くの影響を受けていたことを、北杜夫自らが語っている<sup>10)</sup>。『ブッデンブローグ家の人々』の内容に触れると、その家が街のなかでも知る人ぞ知る有力商家として描いている。しかし、先代の没後、当主が後を引き継いできたものの、弟は性格が商売に不向きであり、妹は、嫁ぎ先が持参金を目当てにするだけで、不幸にも二度結婚に失敗することになる。また、息子は病弱で跡取りには不適格という悲惨な没落の過程を詳述している。一方、「楡家」は病院が火災や戦災の結果、二度にわたって焼失するものの、祖父、息子（養子）、孫の三代が、紆余曲折を乗り越えて、わが道をしっかりと歩む姿を描いている。これは『ブッデンブローグ家の人々』のように、一族が没落していく過程を描いたものとは異にしている。「楡家」は斎藤家の来し方をイメージして書かれた作品であるが、当初、筆者はノン・フィクションであるかのごとく読んでいた。『どくとるマンボウ追想記』（以下追想記）では、「楡家」にかかるフィクション部分を明らかにしているが、「そうだったのか」とはじめて分かるころがあった。いずれにしても、読者にとっては、一気に読ませる興味あふれる作品である。

『白きたおやかな峰』は、カラコルム登山隊に医師として随行した経験をもとに書かれた作品である。旧制松本高校OBが隊長であり、この縁で、多少とも山登り経験のある北杜夫に、医師として同行の話が持ち込まれたものである。作品では、本格的な登山隊として、綿密かつ周到な事前準備が進められることになる。具体的な行動においては、地元の人たちの労力を借りながら、プロジェクトを着実に進行させていく。現実には一筋縄では行かないところがあるが、その過程における諸問題がひしひしと伝わってくる。また、作品の中での医師のユーモラスな行為が、緊張感を和らげるところがあり、読者をしてこの長編を飽きさせることなく読ませしてくれる。この医師についての叙述は、作者の経験がもとになっている。

『輝ける碧き空の下で』は、ブラジルへの移民を試みた人々の苦難な人生を語る大作である。移民した人々の多くは、日本での貧農生活に見切りをつけて、将来の夢を頼りに国を捨てた人たちであった。しかし、辿りつけば、そこに過酷な人生が待っていた。この作品では、かつての棄民政策ともいわれる国の施策に、頼らざるを得ない貧しい人びとの移民生活を追跡し、問題点を明らかにしている。期待した農作物の不作や価格の低落、マラリアによる死者の続出、大群のバッ

タによる作物の被害、葉切りアリによる被害など、入植者は塗炭の苦しみを味わった。また、第二次大戦中の日本人に対する差別的な扱い、戦後のいわゆる「勝ち組」と「負け組」における日本人同士のいがみ合いなど、深刻なテーマを題材にしているが、息も抜けない物語の展開に、読者はその中に吸い込まれることになる。ブラジル移民史の観点からも、貴重な作品といえる。なお、苦勞した人々の中から、成功者が出てきたことに救いがある。長編ではあるが、一気に読ませる魅力的な作品である。なお、この作品の取材旅行を兼ねた作品『マンボウ夢遊郷』（以下夢遊郷）を、併せて読むことをお勧めしたい。

一方エッセイや他の作品（旅行記など）についても、定評のある3点を以下に取り上げておきたい。『航海記』、『青春記』および『月と10セント』の3作品である。

『航海記』はベストセラーになり、一度に多くのファンを得た作品である。この頃、日本人は、自由に海外旅行することのできない時代であった。したがって、作品が伝える海外各国の実情について、人々は、そうした情報に飢えていたといえる。船医として各地を訪問しながら、見聞したことについてユーモアを交えながら語るこの作品は、多くの人々の気持ちを虜にした。結果として、北杜夫の代表作のひとつとなった。

一方、『青春記』は、旧制松本高校での痛快かつ滅茶苦茶な青春を活写しており、楽しい読み物となっている。この時代に、自分の人生の方向を決めるに際して、重大な影響を与えた先生や友人に巡り合えたことは、ただ「素晴らしい」の一語に尽きる。現代の学生が、このように実りある青春を過ごすことができるのであろうか。終戦前後の食料も衣服も何もない時代であったことを考えると、物質面で豊かになったといわれる現代の学生生活と比べて、何が変わったのか考えさせられる。

もう一つは『月と10セント』で、マンボウ赤毛布米国旅行記というサブ・タイトルが付いている。この意味では、これもマンボウ・シリーズの一つと考えられる。サマセット・モーム<sup>11)</sup>の『月と6ペンス』を振ってつけたタイトルとされる。アメリカが人工衛星アポロ11号を打ち上げて、はじめて月に飛行士が降り立ったとき、現地を訪れて取材してきた旅行記である<sup>12)</sup>。

表 1. 北杜夫の主要作品についての分類表

分類	作品名
小説	幽霊 (54)、夜と霧の隅で (60)、羽蟻のいる丘 (60)、楡家の人びと 一部、二部、三部 (64)、牧神の午後 (65)、白きたおやかな峰 (66)、怪盗ジバゴ (67)、黄色い船 (68)、酔いどれ船 (72)、奇病連盟 (74)、木精 (75)、輝ける碧き光の下で 一部 (82) 二部 (86)、大日本帝国スーパーマン (87)、大結婚詐欺師 (87)、神々の消えた土地 (92)、父っちゃんは大変人 (93)、母の影 (94)、消えさりゆく物語 (00)、巴里茫茫 (12)
子供向け小説	船乗りクブクブの冒険 (62)、ぼくのおじさん (72)
マンボウ・シリーズ (エッセイ)	どくとるマンボウ航海記 (60)、どくとるマンボウ昆虫記 (61)、どくとるマンボウ途中下車 (66)、どくとるマンボウおもちゃ箱 (67)、どくとるマンボウ青春記 (68)、人間とマンボウ (72)、マンボウぼうえんきょう (73)、どくとるマンボウ追想記 (76)、どくとるマンボウ雑学記 (81)、マンボウ人間博物館 (82)、マンボウ夢遊郷 (84)、どくとるマンボウ医局記 (93)、マンボウ哀愁のヨーロッパ再訪記 (00)、マンボウ阪神狂時代 (04)、マンボウ恐妻記 (05)、どくとるマンボウ回想記 (07)、マンボウ家の思い出旅行 (07)
エッセイ	あくびノート (61)、へそのない本 (63)
旅行記	南大洋ひるね旅 (62)、月と10セント (71)
その他	この父にして (斎藤茂太と共著) (76)、快妻オバサマ VS 躁児マンボウ (斎藤輝子と共著) (77)、ある青春の日記 (88)、青年茂吉 赤光 (91)、若き日の友情 (辻邦生と共著) (10)

注：かっこ内の数字は発表年を示す。たとえば、(67) は 1967 年、(01) は 2001 年を簡記している (20 以下の数字の場合)。なお、作品発表年と文庫本刊行年とが異なるものがある。

当時、筆者はセミナーがあり、プリンストンに約一か月間滞在していたが、月面着陸の際は授業が中止になり、テレビの前に集まって画面を眺めていたことを思い出す。また、無事帰ってきた飛行士を迎える歓迎パレードは、ニューヨーク中が湧きかえったことはいうまでもない。ニューヨーク市役所の建物からその光景を眺めていたが、紙吹雪の舞うなかを、帰還飛行士たちが熱狂的な市民の大歓迎を受けていた。この光景は、いまでも懐かしく思い出される。本書でも、その当時のアメリカについて、興味深く語られている。

その他の作品について、個々に触れることはできないが、筆者の読んだ感想を基にして、読了した諸作品を分類したものを表 1 に整理した。

## 第 2 章 ユーモアの源泉

### 2-1 両親 (茂吉と輝子) の言動

明治 29 年 8 月守谷茂吉は、父の熊次郎に連れられて山形より上京している。その当時、同郷出身の斎藤

紀一は、浅草で医院を開業しており、娘二人であったことから、跡取りを探していた。一方守谷家では、茂吉を進学させるには経済的余裕がないことから、茂吉を斎藤家の書生にして、勉強させようと考えていた。したがって、斎藤家では、茂吉を当初から養子にするという考えはなかった。茂吉は開成中学に進み、成績もよく、その後旧制第一高等学校に進学した。一高では、教授の夏目漱石から英語を学んでいる。明治 38 年、東京帝国大学医学部に進学が決まり、跡取りとして申し分ない状況となったことから、斎藤家は次女輝子の婿養子として入籍させている。このとき妻となる輝子は、まだ 9 歳であった。養子となったことから、茂吉は後に青山精神科病院を、紀一から引き継ぐこととなった。また、茂吉の詩歌についても、「赤光」が芥川龍之介に「詩歌に対する目を開かせた」<sup>13)</sup>といわしめたように、歌壇のみならず、多くの文学者により評価されたことは有名である。

一方輝子は、明治 41 年学習院女子部に入学し、青山から永田町まで、人力車で通学していた。当時は、乃木希典<sup>14)</sup> 大将が学習院院長を務めていた。輝子が 18 歳になり、茂吉と正式な結婚式を挙げている。孫の斎藤由香は、著書のなかで「お嬢様の輝子と、生まれ育ちが 180 度異なる田夫野人とのバランスを欠い

た結婚を、輝子はよく承諾したものだ」と回顧している<sup>15)</sup>。

この二人の織りなす夫婦の生活や言動が、北杜夫の作品の中で縦横無尽に語られており、読者を楽しませてくれる。

茂吉は、育ちからしても贅沢とは縁の遠い生活をしてきた。また、性格的には、野武士、野蛮人のごとき野太い神経の持ち主であるとともに、事によっては気弱で細々とした繊細な感覚も持ち合わせていた。ものの考え方も実利的で、宗吉が大学進学に際して昆虫学を専攻することについて、「昆虫学では飯が食えない」と猛反対している。その道に進むならば、「学費の仕送りを中止する」とまで言っている。また、友人の子息が哲学を専攻することの可否について相談を受けたが、反対したうえで医学者への道を勧めている。この子息平福一郎氏は、後に東大医学部教授となったが、茂吉の死に際して（助教授時代）、解剖に立ち会ったという不思議な縁がある。茂吉は家の中ではワンマンで通し、癩癩持ちで、意にそぐはないと烈火の如く怒鳴った。万事に質素を旨とし、大好きな鰻も決して「上」を頼むことなく、「中」を注文した。子供に与えることも気がつかないほど、鰻に関しては目がなかった。疎開先では、食糧難であったことから、弟子には来訪の場合は、必ず「弁当を持参すること」と命じていた。宗吉が疎開先を訪れた際、「飯を3杯以上は決して食べるな」と細かい注意を与えたという。人々は、国民的歌人であり病院院長でもあった茂吉という偉人に対して、尊崇の念をもって眺めている。この茂吉へのイメージと、一般庶民と変わらぬ生活ぶりとの、大きな落差があり、このことが読者をして茂吉の性格を強く印象づけることになる。なお、茂吉の私生活について、北杜夫と斎藤茂太の『この父にして』、斎藤茂太『精神科医三代』、『茂吉の周辺』、北杜夫『青年茂吉』が参考になる。

一方、輝子は、まさしくお嬢様育ちで、身の回りのことは女中がこなしていたことから、裁縫、料理、掃除には全く手を染めないという少女時代を過ごしてきた。後年、輝子が、宗吉の着物が短くなってきたのを見て、別の布で継ぎ足してくれたが、全く色の違う布を縫いつけていた。色の異なる布で、継ぎをしても何も思わない人であった。「ダンスホール事件<sup>16)</sup>」により、12年間、茂吉と別居する時代があった。その当時、輝子が叔父の家で過ごしていたところへ、子供たちが頻繁に通っていた。子供にとっては、やはり母親の存在が重要であったことを示している。かつて母は

単身で茂吉の留学先へ赴き、一緒にヨーロッパを巡って帰国したが、その間に青山脳病院は火災で焼失していた。茂吉にとって、その後の病院立て直しのために、資金の借り入れなど苦勞することになる。なお、再建した青山の病院は、昭和20年に空襲により再度焼失している。また、世田谷にあった本院も東京都の強制買い取りで、松沢病院の分院となり、梅ヶ丘病院（2014年10月現在更地）として受け継がれた。この頃、茂吉は疎開していたが、輝子も呼び寄せて一緒に暮らしていた。戦後になって、斎藤家は、疎開先から東京の世田谷区代田に家を見つけて移り住むことになった。

兄茂太のところに孫茂一が生まれ、茂吉はこのほかに可愛がった。廊下を滑って転んだ孫をみて、廊下のニスを家族全員で洗い流させている。しかし、輝子は孫についても淡白で、走り回ると危ないと孫を柱に縛りつけていた。その光景を見た人は、まるでヤギみたいだと言わしめている。茂吉の没後、輝子は、茂太や宗吉が外遊することに刺激を受けて、世界各国をたびたび旅行するようになった（通算108カ国を旅行した）。また、体調が心配されても、「海外旅行に行く」と治るといって出かけるが、現実にその通りとなった。帰国に際して、空港に迎えに行くと、いつも真先にタラップから降りてくるのは輝子であった。客室乗務員の制止も聞かずに、我儘を通したのではないかと思われる。その天真爛漫かつ行動的などころは、多くのエピソードとして、以下の書に記されている。北杜夫の『母の影』、斎藤茂太『快妻物語』、斎藤由香『猛女とよばれた淑女』、斎藤輝子と北杜夫の『快妻オバサマVS躁児マンボウ』を参照されたい。これらの書には、輝子がマイペースで、思いのまま行動する愉快的な姿を、生き生きと伝えている。一方、輝子は日本赤十字社に毎年決まって多額の寄付をしていたこと等を考慮すると、「じゃじゃ馬」とはおおよそ縁のない「育ちの良さ」が感じられる。また、疲弊した戦後の時代に、かつて贅沢をしていた輝子が、一番ケロリとしており、粗食にも耐えて泣き言一つ洩らさなかった。茂吉は世事に疎かったが、一方、輝子はお嬢さん育ちとはいえ、現世の実行力を立派に備えていたことになる。青山の土地を売り払い、兄の開業する新宿大京町の土地を買ったのも、輝子の功績となった。岩波書店から借金をして買ったものであるが、現在便利な場所にあり、医院が繁盛しているのも、輝子のお蔭と考えられている<sup>17)</sup>。

## 2-2 少年時代の思い出と趣味

少年時代の思い出や経験が、その後の人生に重要な影響を与えることは容易に理解できる。たとえば、斎藤家では、子供のころは夏になると、葉山で過ごして水泳など海岸での遊びを楽しんでいた。また、箱根の別荘では、昆虫を追いかけるほか、夜店や送り火の祭典を楽しんでいる。世間の水準からみて、誰が見ても豊かな暮らしであったと思われる。戦前の小学校（昭和16年に国民学校となった）では、校内の一定場所に、「奉安殿」、二宮尊徳の銅像、国旗掲揚塔があり、「奉安殿」に対しては、登下校時に最敬礼することになっていた。このなかには、「教育勅語」の謄本と、天皇・皇后の「御真影」が奉置されていたからである。式典に際して、教育勅語が全校生の前で奉読される。「朕惟フニ我カ皇祖高宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ・・・爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ・・・」と続くが、この間生徒は頭を下げて、奉読の終了を待つことになる。当時の生徒達には、「夫婦相和シ」を「夫婦は鯛（イワシ）」と聞こえて吹き出しそうになったと述べている。下級生の多くは、教育勅語の意味が、まだ良く分からなかったと思われる。

この当時、宗吉が力を入れた遊びや趣味について、ここでは草野球、卓球、昆虫採集について以下に取り上げてみる。

草野球は、近くの原っぱで近所の子供仲間と楽しんでいた。その当時は、青山界隈でも子供が草野球を楽しめる原っぱが存在していた。時折、郵便配達のおじさんがきて、「一度打たせてくれ」と頼むので打たせたが、なかなか引き下がらないので困ったと書いている。後にこの人が子供チームの監督になった（『マンボウ家の思い出旅行』参照）。宗吉は、子供時代から草野球を楽しむ程度であった。後に旧制松本高校と旧制松本医専との野球試合では、野球経験者は誰でも参加してほしいと促されて、ピッチャーを飛び入りで務めたことがある。ある試合では活躍もし、別の試合ではコテンパンにノックアウトされたことも伝えている。つまり、松高のレベルはこの程度であったといえる。しかし、野球については一廉の知識があり、戦後人気を得たプロ野球のなかでも阪神タイガースの熱烈なファンとなった。松本高校時代のバンカラな校風と、ダイナマイト打線の人気であったタイガースとが、よく似ていることからファンとなったものである。同氏の熱烈な応援ぶりは、多くの作品に述べられている。ひとたび試合が始まると、テレビにかじりついて、「よ

し！」とか「馬鹿！」と絶叫する騒ぎで、終わるまで何も手に付かない様子であった。チャンスがくると、ヨガ式念力を発して幸運を祈るが、その発し方は人語に絶するものがあった。また、ゲンを担ぐことでも徹底しており、着替えると負けるのではないかと、9か月間同じパジャマで過ごすこともあった。熱烈なファンとして、まるで球団オーナーや監督になったような発言もあり、時には試合中に球場まで電話し、「投手交代」を進言するなど、その言動に多くの野球ファンを楽しませた（現実には聞き流されていた）（『マンボウ阪神狂時代』参照）。

卓球は、生活圏内にあった病院の卓球台で、日頃入院患者とともに楽しんでいた。卓球というよりもピンポンといったほうが、この当時は適切であったかも知れない。ある時、いつも遊んでいた女性患者のヘアピンを、いたずら半分で取り上げたところ、はじめは笑いながら追っかけてきたので、卓球台の周りを逃げ周り一緒にふざけていた。しかし、突然猛烈に怒りだしたこの患者が、自分に向けてラケットを放り投げてきたので、「ドキッ」としたと記している。月日が流れて、兄の病院にこの時の患者が入院していることがわかった。昔のことを尋ねてみたが、この患者は唯ヘラヘラ笑っているだけであった。いずれにしても、子供のころから卓球については、身近な所に道具があり、楽しむチャンスがあったことから、技量も自然に身に付いていたと思われる（『青春記』参照）。

北杜夫の、その後の人生にも大きな影響を与えた昆虫採集とその知識については、素人の域を超えている。子供のころ、病気で入院していた時期があり、買ってもらった昆虫図鑑をくまなく眺めていた結果、退院後に昆虫を見つけては、その名が何であるかを見分けることができたという。その後の採集にも拍車がかかったと思われる。昆虫採集の愛好家間の昆虫交換では、「肅啓 キボシカミキリなら二匹あります。謹言」などという不思議な文章のやり取りで、意思疎通を図っていた。戦時中の空襲が続く時代に、高校受験を目指して作文の添削会に入っていたことがある。「わが道」という題に対して、「昆虫学者になりたい」と書いて提出すると、「いまだきそんな呑気なことを言っている場合でない」と厳しく批判された。次の機会に、特攻隊のことを書くと、今度はそれが模範文として、広く受験生に披露された。実際の試験においても、この特攻隊について書き、見事入学を果たしている。

ある時期、昆虫の専門家を志したほどであり、その生態、観察事例、昆虫にまつわる話題に事欠かないほ

どの博学である。しかし、実家が空襲に遭い、多年集めてきた標本すべてが灰燼に帰した。『どくどくマンボウ昆虫記』（以下昆虫記）は、昆虫に関心のある人だけでなく、一般の読者にもファンの多い作品である。昆虫に関する普遍的な知識を得る教養書としても価値のある作品といえる。

### 2-3 旧制松本高校の思い出

麻布中学では、良好な成績を残していた。また、生物クラブでは、こと昆虫に関する博識ぶりに、仲間から一目置かれている存在であった。数学、物理が得意であったが、文学には縁がなく、父の書棚に「長塚節」という本があり、長塚ブシという民謡の書かと思ったほどであった。高校に入って、いつの間にか、文学書ばかり読むようになったのは、やはり茂吉の偉大さに心打たれたからであろう。松本高校を志望した理由は、叔父に同校出身者が居たこと、昆虫採集ができること、山登りにあこがれていたことなどを志望理由に挙げているが、他にも理由はあったかと思われる。たとえば、都会では空襲が頻繁にあり、危険であったことが松本高校受験に繋がったことも挙げられよう。また、親(茂吉)は、宗吉が医師になることを希望していたことから、高校の理科に進ませたことになる。当時は、文科では将来兵隊にとられる心配があり、受験生を持つ親は、できるだけ子供を理科に進学させようとした。戦後、理科から文科へ専攻を変える学生が増えたのは、志望を無理に曲げていたことを正すためであり、戦時中の事情が背景にあったと考えられる。

バンカラな旧制高等学校に入学し、寮に入って、はじめて先輩のストームを受けたが、入寮の感想を聞かれて「トイレが汚い」と述べた。もっとまともな感想があるものと期待していた先輩から「バッキヤロウ」と顰蹙の罵声を浴びている。この先輩の中には、辻邦生も交じっていた。なお、彼は高校生活を堪能して、結局北杜夫より一年遅れて卒業した。当時は、学徒動員で軍需工場において勤労に励むことが普通であった。授業は休止状態で、空襲で学生が死亡する事例もあった。学徒動員で若干の報奨金を受け取るが、友人たちはクラシック音楽のレコードを買っていた。一方宗吉は廣澤虎造<sup>18)</sup>の浪曲レコードを購入し、コンパでも一節唸っている。茂吉が極度の音痴で、「君が代」さえもろくに歌えなかったように、宗吉もその血を引いていた。そのため浪曲を唸ったが、これが結構仲間に受けた。一度、廣澤虎造が松本を訪れた時、公演を聴きに行ったが、満員でありながら、さすがに松高生

は誰もいなかった。

終戦を迎え、授業や学校生活が曲がりなりにも始まったが、依然として食糧不足、物資の不足は続いた。少し米が手に入ると、これを持って一人で信州の山を歩いている。この時の眺めの素晴らしさや、眼にした草木、昆虫について、その後の作品のなかで、しばしば触れている。こうした物のない時代ではあったが、白線を巻いた帽子(醤油と油で古めかしくした)、朴歯の下駄とマントを用意して、旧制高等学校生のスタイルは何とか整えている。高校の寮では、友人たちとの哲学的、文学的な議論を日夜聞かされる機会となった。先輩たちの「カント曰く」、「ヘーゲル曰く」などの議論に刺激を受けている。しかし、日々の寮における食事が、コーリヤンの飯にカレーがかかっているのは上の方であった。畑のネギや、柿をパクったり、何でも腹の足しになるものは食べた。みんなが栄養失調の状態ながら、やがて松高名物のストームや駅伝が復活している。ストームでは寮歌を歌うが、歌というより、動物園で猛獣が吠えている雰囲気であった。松高の寮歌のかなりの数は、浜徳太郎氏の作曲である。浜氏は、各学年を表、裏各2年合計6年在学(ゼツクスと呼んだ)した猛者であったが、名曲を多数残している。また、ストームで欠かせない「デカンショ節」は、デカルト、カント、ショウペンハウエルを意味するといわれている。しかし、篠山地方の「糸つむぎ唄」からきているという人もいる。

旧制松本高校の教授にも、名物といわれる人がいた。トーマス・マンを研究する望月市恵先生は生涯の師となった。コンパの席上、酒に酔って先生の頭をボカリと叩いてしまい大騒ぎとなったが、寛大な心で許して貰ったこともあった。また、当時蛭川幸茂という名物先生もいた。数学の教授であるが、風体にはお構いなしで、乞食と見まがうほどであった。荒縄を帯代わりにして着物をしばっていたこともあった。陸上競技部長として、自らも練習に参加するほどの力の入れ込み方であり、この蛭川先生の数々のエピソードが松本高校に残されている。蛭川幸茂『落伍教師』は、松本高校での素晴らしい青春物語であるとともに、貴重な記録といえる。『青春記』と併せて読むと、当時の松本高校や旧制高等学校とは如何なるところであったかを窺い知ることができよう。

いずれにしても、北杜夫の作品の多くは、この松本高校時代の真理を追究し、激論を交わした寮生活と併せて、滅茶苦茶で愚かしい「バンカラ」生活に依存しており、いかにこの時代が人間形成に大きな影響を及

ぼしたかを示している。

## 2-4 医学生と医局勤務時代

無事に高校を卒業し、東北大学医学部に進学した。これも茂吉が医学部に行くことを厳命しており、「それが出来なければ、荷車引きになっても生計を立てろ」などと書いてきた。このため、東京大学は無理なので、東北大学を目指して受験勉強に精を出した。その結果、奇跡的に（本人の言葉）合格したが、茂吉は殊のほか喜んだという。

終戦直後の混乱時代であったが、アメリカを中心とする大衆文化が我が国に入り込んできた。とくに進駐軍の兵隊たちによる影響が大きかったと思われる。この結果、社交ダンス（ジルバやマンボなど）が若者間で流行し、ジャズ、ハワイアン、カントリー・ウェスタンなどの音楽が世の中に受け入れられた。戦前の職業野球は、見向きもされなかったにも拘らず、戦後のプロ野球が俄然人気を博するようになった。民主化を進める上で、プロ野球人気は、連合軍にとっても好ましいこととされた。宗吉にとっては、まだまだ貧しい学生時代ではあったが、ダンスに興じるなど人並の青春時代を過ごすことになる。

この時期、夏休みに箱根の別荘で茂吉と一緒に過ごすことが多かった。茂吉の偉大さを認識はしていたが、自分が文学を志していることは一切口に出さなかった。医学の勉強は、表面だけで、隠れてトーマス・マンなどを読み漁った。どうしても医者という職業は好きになれず、この時代から、密かに雑誌などの懸賞に応募を始めている。入選した作品があっても、賞品や懸賞金は、手に入ることはなかった。それほど貧窮した出版社ばかりであった。このころ、筆名を北杜二夫とつけていた。北は仙台にいた関係から付けたものである。名前は、トーマス・マンの『トニオ・クレーゲル』に凝っており、名付けてみたが、不自然なので二を取って、最終的に北杜夫とした（『どくとのマンボウ途中下車』(以下途中下車)p183参照)。このころ、「文芸首都」という同人雑誌に投稿するようになり、同人として認められることになった。この時代に、田端麦彦<sup>19)</sup>、佐藤愛子<sup>20)</sup>、なだいなだ<sup>21)</sup>、日沼倫太郎<sup>22)</sup>などとの交遊が始まった。佐藤愛子は、「スフの学生服を着た青年」、「泥だらけの短靴で、ダンスに誘ってきた」、さらに同人仲間と酒を飲んだあと、外に出て「いきなり電柱に向かって立ち小便をした」など、当時の北杜夫のことを語っている（『北杜夫の世界』および『北杜夫 どくとのマンボウ文学館』参照）。その後、イ

ンターンを終えて慶応大学の医学部神経科助手になって東京に戻り、文芸活動にも力を注ぐようになった。その当時、『幽霊』を自費出版している。また、かねてよりトーマス・マンを熱愛していたことから、ドイツ留学を試みたが、書類選考であっさり選から漏れている。しかし、偶々、水産庁のマグロ調査船、照洋丸の船医の口があり、北ヨーロッパへの旅に出ることになった。これが『航海記』を出版する契機となった。旅先のハンブルグで、フランス留学中の辻邦生と会っている。また、現地の商社支店長宅に招かれたが、その家に居た娘（横山美智子）と、後年結婚することになった。

その後、慶応病院から、山梨県立精神病院へ赴任命令を受けた。担当医は二人であったが、先任の医師が結核のため入院し、一人で切りまわす時期がしばらく続いた。この間の診察や勤務ぶりについて、『どくとのマンボウ医局記』（以下医局記）に詳述されている。結局1年間この病院に勤務することになるが、この間の患者の言行などが紹介されている。こうした事例については、単純に笑っているわけにはいかない。精神医学は人間について学ぶ分野であり、病人が常人と比べて変わっているところを明らかにしている。ところが、一般に人間は、他人の欠点を指摘できても、おのれのことはあまり分からないところがある。しかも、自分について厳密に知ろうとしない。このことこそ人間の愚かなところといえよう。医師として多くの患者を診察しながら、この経験を後に作品に取り上げており、読者をして視野を広げさせてくれたといえる（『医局記』、『どくとのマンボウ回想記』（以下回想記）、『青年茂吉』および『ある青春の日記』を参照されたい）。

## 2-5 旅行をテーマにした作品について

ユーモアの源泉を辿ることとは、直接関係がないとしても、旅行をテーマにした作品を除外するわけにはいかない。これらには、北杜夫の子供のころからの体験、学生時代の思い出、医学生や勤務医としての経験、文壇仲間との交遊、躁鬱病の様子などが場面ごとに縦横無尽に描かれている。これは、北杜夫のストーリー・テラーとして、持って生まれた才能に依存している所以といえよう。一例を示せば、『夢遊郷』になかで、①ブラジルの海辺を訪れた時、子供のころに葉山海岸で遊んだ楽しい思い出に浸っている。②弓場牧場の舞台裏で、遠藤周作の率いる「樹座」で、自身が演じた演劇のことを連想している。③異国の地で、年甲斐もなく猛然と蝶を追いかけけている。④移民が罹った黄熱

病とマラリアについて、医師としての見識を示している。⑤鬱のときは、家を一步も出ないにもかかわらず、蝶がいれば捕虫網をもって走り回った。蝶への思い入れが際立っていることを示している。⑥歓迎してくれた牧場で、お礼に浪曲を披露している。躁と鬱では、全く異なった対応を示している。⑦高地にくと、高山病でカラコルム遠征隊が苦労した当時を思い出している。⑧マチュピチュに行くのに、タイガースの野球帽では場違いであると思い、現地で帽子を買っている。⑨チチカカ湖へ訪れた母輝子が、乗船の際に板がはずれて、湖にザブンと落ちたことを思い出し、母のあられもない姿を想像している。このように、話を進めていく上で、随所に過去の思い出や経験、そして趣味や見識を縦横無尽に披露している。こうした観点から、主なる旅行に関する作品を、以下に拾い出しておきたい。

上述の『夢遊郷』は、中南米を訪れた際の旅行記であるが、これも各国での印象や、その国の文明および歴史について、のびやかに語っている。メキシコや南米各国において、国民の生活や暮らしぶりを見ているも、貧しいことに悲壮感がなく明るく生活していることが魅力的である。これを日本人との比較において、単に国民性に起因するものであると考えるのは如何なるものであろうか。このことについて、読者にある種のヒントを与えているように思う。長編『輝ける碧き空の下で』を書くための取材を兼ねており、実に楽しい道中記である。双方を読むことを勧めたい。

先に触れた『航海記』は、あまりにも有名である。日本の人々がまだ自由に旅行などできない時代に、アジア、アフリカ、ヨーロッパ各地を訪れ、体験した愉快な出来事や、その地の観光、文化などを楽しく語っているすばらしい旅行記である。行く先々についての描写だけでも魅力があり、読者をして、いつかは行ってみたいと思わせるところがある。

『南太平洋ひるね旅』は、南海に在って、およそ文明の発展とはかかわりなく、旧態依然とした世界で悠々と生きている人びとのことを活写している。ハワイからタヒチ、フィジー、ニューカレドニア、サモアなどを訪れ、人々の生活を語っているが、あくせくして生きる世界もあれば、毎日を悠然と生きる世間もある。何が幸せかを考えさせる読み物である。なお、今では使わない「土人」という言葉が出てくるが、愛嬌といえる。

『月と10セント』も先述しているが、アポロ11号の打ち上げが発表されて、人類が初めて月面に降り立

つという画期的な計画に対して、ヒューストンだけでなく、アメリカ各地を巡り、人々の反応を取材したものである。したがって、アポロ計画に限らず、各地で見聞したこと、体験したことを面白おかしく語り、読者を飽きさせない作品となった。とくに「月乞食」と称して、「かぐや姫」の子孫を名乗り、奇抜なパフォーマンスを試みている。しかし、短冊を1ドルで売ろうとしたが、ケープ・カナベラルではNASA<sup>23)</sup>職員に追い払われた。また、タイム・ライフ社前に置かれた月着陸船模型の近くで、看板を掲げて立ってみたが、訝しげに見る人はいても、10セントのパンフレットさえも買おうという人は無かった。「月と6ペンス」というタイトルの意味をどのように理解すればよいか案じたくなる。北杜夫は、この著の最終章で、「駄文を長々と書いた。世の中には無駄が必要だ。世界中が必要なことを追い求めている。そんなことを続けておれば、世界は破滅する。その意味からも、この無駄がせめてもの慰めになる」と自嘲している。

『航海記』以来、北杜夫の旅行記は、それぞれが読者の気持ちを作品の中に引き込んでしまう凄さがある。それは多くの読者が知らない世界を記述したこともあるが、見聞の内容に楽しさや思いがけない出来事をユーモアたっぷりに語るどころが、読者を魅了させるからであろう。この点に関しては、カラコルムへの登山に医師として同行したときの体験を基にして書かれた小説『白きたおやかな峰』は、旅行記ではないが、すばらしい作品である。ディランという巨峰を目指した遠征隊は、高度差であと約100メートルを残して撤退した。この小説の中では、成否を告げることなく巻を閉じている。厳しいテント生活、現地の人々との交流、登頂の試行錯誤は、登山隊に参加しなければ描けないところである。同行ドクターのひょうきんでユーモアのある行動が、長編を飽きずに読ませられる。まさしく山岳小説であるが、視点を変えると旅行記の一種とも言えよう。なお、この登山隊でコックとして雇ったパキスタン人と、後に劇的な再会を果たしている。しかし、この再会后、ほどなくこの男は亡くなった（『回想記』および『巴里茫茫』参照）。

なお、国内旅行についてもユーモアのある作品がある。たとえば、地域によって面白い姓があることを語っている。これらを羅列すると「猿」(サル)、「一二三一二」(ヒフミカツジ)、「鼻進」(ハナススム)、「一寸木留蔵」(チョットキトメゾウ)などである。和歌山に「小鳥遊」という姓は、(タカナシ)とよむ。鷹が来ないので小鳥は安心して遊べることから生まれたという<sup>24)</sup>。

博学ぶりを披露しており、このように楽しみながら読める作品がある。

## 2-6 友人と知人

多くの交友を通じて、得たものも多かったと思われる。麻布中学の先輩奥野健男<sup>25)</sup>は、文芸評論家として活躍していたが、北杜夫を斎藤宗吉であることを、偶然軽井沢のバス停留所で出会うまで知らなかった。それ以降、何かにつけ支援してくれている。また、初期の文芸作品を出している頃、文芸首都という同人誌の主幹が保高德蔵<sup>26)</sup>である。同氏の指導で世に出る契機を掴むまでに至ったが、その間迂余曲折があった。資金力がなくこの同人は自然消滅していくが、この時代の同人仲間とは多年親交を結んでいる。このうちの一人佐藤愛子は、「親父の佐藤紅緑の娘として、困ることもあるのか」と、北杜夫から初対面で質問されている。後に、北杜夫が茂吉の息子であることがわかり、佐藤愛子から痛烈に皮肉られた。この二人はまだ駆け出しの時代から、お互いの力を認め合い、研鑽を積んだ文壇仲間として、長い付き合いがあった。北杜夫の没後、佐藤愛子はしのぶ文章を新聞に載せている（東京新聞 2011.11.1 夕刊、河出書房新社『北杜夫』p2-3 参照）。

遠藤周作とは、お互いが無礼講の付き合いを続けており、互いに許しあった仲間の一人である。私的な交流においても、イタズラ電話を掛けてくるなど同氏の天真爛漫な姿を、いろんな場面で披露している。遠藤周作は、作品を書き上げている時間と、息抜きをする場面とを使い分けるところがすばらしく、子供っぽい酒席でのパフォーマンスは、場の雰囲気をやがうえでも盛り上げる。遠藤周作が主宰する文士劇「樹座」にも北杜夫は担ぎ出されて、ハムレット役を演じたが、演技ぶりは推して知るべしといえる。

松本高校以来の親友といえる辻邦生は、大学での講義を続けながら、『背教者ユリアヌス』、『西行花伝』などの立派な作品を残した。前書については、発刊に際して、北杜夫が感想と推薦の言葉を述べている。また、最後の作品である『のちの思いに』というエッセイでも、北杜夫との交遊が記されている。トーマス・マンの生地や墓所を二人で尋ねたほどの仲であり、お互いに励ましあって生きてきた。辻邦生が、真面目で作品も審理を極めるといふ姿勢を貫いてきた。一方、北杜夫の作品には、純文学もあれば、マンボウ・シリーズのごとくユーモアあふれる作品も発表しており、二人の作風は異ったものがあった。なお、辻邦生と北杜

夫の交友は書簡集として『若き日の友情』に収録されている。なお、株取引に嵌った北杜夫を説得して、止めさせたのも辻邦生であった。

作家で医師のなだいなだは、ペンネームがスペイン語で (Nada y Nada) から付けたものである。英語では (Nothing and Nothing) という意味になる。医師でありながら、文学においても多数の著作を発表している。医学部時代に講義のノートはとらなかったという。それでいて、自分よりもはるかに博学であったと、北杜夫が感想で述べている。北杜夫にとって、どちらの分野においても、親しく意見を交わすことのできる仲間であった。

宮脇俊三<sup>27)</sup>の紹介により、同氏の隣にある井の頭線東松原の土地を購入し、結婚後の新居を構えることになった。同氏には、結婚披露宴の司会もやってもらっている。中央公論社の編集部にいたことから『航海記』の執筆を依頼したご縁で、多年隣人としての付き合いが続いた。同氏によれば、北杜夫は、パソコンやワープロなどの機械に疎くファックスなども揃えなかったという。運動不足を解消するため、犬や孫の散歩をさせているのを見かけたが、まるで北氏が散歩させられているようであったと語っている。永い付き合いのなかで、はっきり言えることは、北氏が、紳士であること、心優しい人であると述べている（河出書房新社『北杜夫』参照）。

## 2-7 躁鬱病のこと

本来なら深刻なテーマといえるが、北杜夫は自らの躁鬱病についてユーモラスに作品の中で語っており、世間に知られるようになった。躁と鬱との時期により、自らの生活が全く異なる状態になることを明らかにしている。たとえば『マンボウ雑学記』p155-194で、自分の症状について、神経科の専門医であった北杜夫が、自身の症状をわかりやすく解説しており、貴重な記録といえる。

なお、自らの記述だけでは、この病気が読者にはどの程度のことが分かりにくいところがある。たとえば、長女の斎藤由香は、父のことを新聞で回想しており、家族にとってもその扱いに困ったことを述べている（2014.4.22 日本経済新聞夕刊）。これによれば、父（北杜夫）は小学校一年ごろまで、家の中で誰にも「ごきげんよう」と挨拶し、振る舞いも穏やかであった。ところが、その年の夏休みが終わり、軽井沢の別荘から帰宅すると、父はまるで別人のようになっていて驚いている。以後、躁と鬱の状態が交互に現れるようになって

た。母（喜美子）が常に前向きにサポートしてきたと記している。この点については、身近な人でなければ伝えられないところであり、読者にとっては、「大変なことであった」と思うばかりである。

歴史的には、躁鬱病のような精神にかかる病気について、患者や関係者は、一般に世間に知らせることを控えてきた。また、神経科医師についても「狂人守り」などと呼び、ある種の特別な目でみるきらいがあった<sup>28)</sup>。しかし、北杜夫の作品を通じて、「北杜夫のような病気」としてポピュラーになったことから、躁鬱病患者において精神科受診の敷居を低くした功績を評価する人がいる<sup>29)</sup>。

一番大変だったのは、躁病が昂じて株の売買にのめりこんだことであろう。取引を重ねて、結果的に大損を来し、借金が積み重なってしまった。家族や友人の説得などにより、事をおさめたが、この様子は『マンボウ恐妻記』に詳述されている。

しかし、愉快な話もある。ブラジルの弓場農場を訪れた際、農場の人々が北杜夫達3人のために、ダンスを踊るなど歓迎してくれた。躁期にあった北氏は、お返しに廣澤虎造節の浪曲を唸っている。拍手喝采であったため、さらにできる限りの声を張り上げて、あと二節を唸っている。この場面について、同道者の感想は、「北さんの浪花節は、物凄く下手だった。それなのに、顔を真っ赤にして、なかなか止めない。これが躁病というものかと思った」と述べている。後に、その感想を知った北氏は、鬱期にあつて落ち込んでしまったことを記している（『夢遊郷』参照）。

上記の如く、北杜夫の多くの作品から、ユーモアの源泉を探ってみた。紙数の関係もあり、作品の中で語られるユーモアのある表現や行動などを全て網羅することができなかった。このため、当該作品を読んでいない人には分かりにくいところがあったかと思われる。

### 第3章 むすびにかえて

北杜夫のユーモアの源泉について、ユーモラスな表現で語られている思い出、言動、経験、交友などをもとに、以下のように整理してみた。

#### 3-1 両親の思い出と豊かな家庭に育った子供時代

- 1) 国民的歌人であり、病院長でもある茂吉の偉大さについては、世間の人々は尊敬のまなざしで見ている。北杜夫が文学にあこがれるようになったのも、結局は茂吉の凄さに自らが感化されたからといえ

る。しかし、茂吉の小市民的な言動が多くの作品のなかでユーモラスに語られており、読者はその意外性に驚くことになる。

- 2) 母輝子もまた、宗吉の成長に大きな影響を与えた。令嬢として育ち、何の不自由もなく育ったが、晩年は海外旅行を重ねている。その思いつけば行動にうつす姿がユーモアたっぷりに語られて、これが多くの読者を魅了した。
- 3) 箱根や葉山での夏休みは、子供たちにとって忘れられない思い出となった。当時、こうした生活を楽しめたのは、やはり家庭が豊かであったからといえる。また、近くの原っぱが、草野球や昆虫採集など楽しい思い出を作る場所となった。こうした楽しさを、ユーモアたっぷりにしかも生き生きと描いている。

#### 3-2 学生時代の思い出（旧制高等学校と医学生時代）

- 1) 都会の坊ちゃん育ちが多い麻布中学から、旧制松本高校に進学した。当初は、そのパンカラ振りに戸惑ったといえる。しかし、学生生活に慣れると、思いきり羽を伸ばすことができた。立派な師や友人に恵まれて、人生の歩むべき道にも巡り合えたといえる。ユーモア溢れる寮生活など、読者の心をとらえるものがある。
- 2) 茂吉が、宗吉に医師になることを強く求めたことから、東北大学の医学部に進学した。医師にはなったものの、文学への思い断ちがたく、小説などを同人誌に投稿するようになった。ただし、医師になったことが、無駄になったわけではなく、その後の作品に強い影響を与えている。また、それが世に出る重要な要素となったともいえる。

#### 3-3 作家としての活動と交友および持病

- 1) 紀行文や旅行記が多くの読者を惹きつけた。これは、北杜夫の物事に対する強い好奇心の賜物であり、これが後に長編小説にも生かされている。読者が知りえない世界について、作品を通じてユーモアたっぷりに語りかけるところが大きな魅力となった。
- 2) 文壇の多様な人々とのつながりが、作家活動において刺激となった。遠藤周作、佐藤愛子、辻邦生など、北杜夫の作品にもしばしば名前が取り上げられている。お互いに競い合い、助け合った仲間がいたことは素晴らしいことであった。
- 3) 自らが躁鬱病にかかり、折々の様子をむしろユー

モラスに語っている。現実には、家族が心配し、苦勞することになるが、とくに躁の時期に株式投資に嵌って、大損をすることになる。借金などで家族も困るが、文壇仲間の熱い友情にも助けられて、危機を脱することになった。

ユーモアの源泉とは何かを探ってきたが、それは、北杜夫の成長過程や人生を辿ることに繋がった。同氏の人生の一コマコマと密接な関係があるといえる。なお、北杜夫の作品には、政治的な発言がないことだけでなく権力に迎合することもない。淡泊な表現のなかにひょうきんともいえる自らの行動や欠点を曝け出すことにより、読者を安心させるとともに笑いを誘うことになる。それは、北杜夫の人生における教育的背景にも由来するのではないだろうか。教育には、大きく三つの様式があるとされており、制度化された学校教育（フォーマル教育）、学校外の柔軟な学習活動（ノンフォーマル教育）、家庭内の躰や伝統的な訓え（インフォーマル教育）に大別される<sup>30)</sup>。北杜夫の経歴になぞらえてみると、どれをとっても素晴らしく、氏の豊かな家庭環境、その後を受けた教育の他、自らの努力と向上心などの結果であると考えられる。教育活動が幼少期の人間形成やその後の生活に重要な役割を果たすとともに、作品にも大きな影響を与えることになったと考える。

また、ユーモアのある表現とともに、言外に主張または表現していることがあり、これについて、以下に筆者の私見としてコメントしておきたい。

たとえば、茂吉が食べ物について、宗吉などに細かく指示を与えていた。そのことが、ユーモラスに伝えられているが、当時としては食糧難の時代であり、食に有りつけることが、生きていくために不可欠であった。生きるか死ぬかの問題をユーモアの材料にしているかのごとく思われる。まして、今日のような飽食の時代に生きる人々には、理解出来ないところがあるろう。戦争中や戦後の一時期における深刻な食生活を明らかにして、戦争の悲惨さを伝えているといえる。

また、母輝子の思いのまま行動する様子が読者を楽しませるが、ノブレス・オブリージ (noblesse oblige) について、しっかりした考えがあったことを忘れてはならない。

かつて、東京の街中にも広っぱがあり、宗吉は、ここで草野球を楽しみ、トンボ、蝶やバッタを捕まえて遊んでいた。この頃の楽しい思い出は、生涯忘れられ

ないものとなった。しかし、経済成長が進むにつれて、こうした広っぱには、高層住宅や商業施設が建設されて、子供たちが遊ぶ場所は今や無くなってしまった。経済的に豊かになったとはいえ、失ったものも大きいことを伝えている。

多くのエリートを輩出した旧制高等学校も今は無く、教養主義に重きを置いた当時の教育制度や、バンカラな寮生活など、現代の学生には理解できないところがあるろう。語りつくせないほどの素晴らしい青春時代を過ごし、良き師や生涯の友と巡り合えた旧制高校ではあったが、今やその卒業生も少なくなってしまった。『青春記』は、その記録を残しており貴重である。

また、躁鬱病に罹ったことを作品の中でしばしば取り上げた結果、今では「北杜夫のような病気」と世間でも知られるようになった。こうした病気で悩む人たちを特別な目で見ることもしなくなったことを考えると、北杜夫の行為は評価されねばならない。

以上のとおり、北杜夫の作品におけるユーモアの源泉について考えをまとめてみた。また、言外に伝えていることについても、併せて私見を整理した。あえて強調しておくが、ユーモアは、品のない言葉を駆使して、意図的に笑いを取る一部の漫才のようなものではない。阿刀田高の言にあるように、その人から滲み出てくるようなものである。つまり、北杜夫のユーモアは、ほかならぬ豊かな家庭における育ちの良さ、多彩な趣味、身に付いた教養と教育、素晴らしい教師との出会いや彼を取り巻く友人からの影響や感化、知的好奇心に富む旅行経験などから育まれた人間性やインテリジェンスなどから溢れ出るものであると、改めて考えさせられることになった。

## 謝 意

山下博之（郷土史研究家）、伊藤暢朗（豊九会会長）、野畑康（元ダイヘン環境管理部長）、栗本征彦（友人）各位から貴重な助言を頂いた。また、長岡智寿子（国立教育政策研究所フェロー）、長岡健壽（サントリー食品インターナショナル（株）品質保証・技術部 部長）からもコメントを得た。記して謝す。

## 注

- (1) 阿刀田高『ユーモア革命』文春新書 (2001) を参照した。ここで、ユーモアについて、「少し外れて

- いることを感知する心理と結びついており、それが笑いを誘うかどうかは二義的な問題と述べている。ただし、ユーモアは、半分ほど笑との関わりがあり、ユニークな視点でものを見ることについても、深く関わっている。これは脳みその活性化に役立つ。この点が重要ではないか」とも指摘している。前掲書 p.20-22 参照。
- (2) 斎藤茂太 (1916-2006)、斎藤茂吉の長男、北杜夫 (宗吉) の兄。明治大学文学部、昭和医科大学 (元昭和医学専門学校) 卒、慶応義塾大学院医学研究科博士課程、医学博士。斎藤病院名誉院長、日本精神科病院協会名誉会長、元日本ペンクラブ理事、元日本旅行作家協会会長などを務めた。多数の著がある。
- (3) 斎藤由香は 1962 年生まれ、斎藤茂吉の孫で、作家北杜夫の娘。成城大学文芸学部国文科卒。サントリー勤務 (広告会社に出向)。著作に「窓際 OL シリーズ」や「猛女とよばれた淑女—祖母・斎藤輝子の生き方—」がある。
- (4) 辻邦生 (1925-1999) は、北杜夫とは松本高校時代からの親友。東京大学大学院仏文科修士、その後フランスに留学。北杜夫がドイツを訪れたとき、一緒にトーマス・マンの郷里を訪れている。立教大学や学習院大学で教鞭をとりながら「背教者ユリアヌス」、「西行花伝」など多数の著を出している。夫人辻佐保子氏は名古屋大学名誉教授。辻邦生の「のちの思いに」のなかで、二人の恋の馴れ初めについて、詳しく書かれている。
- (5) 望月市恵 (1901-1991) ドイツ文学者。東京大学独文科卒、旧制第一高校、松本高校各教授、信州大学教授をへて、信州大学名誉教授。
- (6) トーマス・マン (Paul Thomas Mann) は、(1875-1955) ドイツの小説家。リュウベックの富裕な商家に生まれて、その家の歴史をモデルにして長編『ブッデンブローグ家の人々』を書き上げた。その後、1929 年にこの作品によりノーベル文学賞を受賞した。1933 年に、ナチス・ドイツに反対して亡命し、スイスや米国で過ごしている。日本では、三島由紀夫、北杜夫、辻邦生が、トーマス・マンの作品を高く評価していた。
- (7) 河出書房新社 『北杜夫 追悼総特集』(2012) p.222-223 における斎藤國夫作成の「北杜夫略年譜」を参照した。
- (8) 別冊信評『北杜夫の世界』新評社 (1975) p.174-207 を参照。
- (9) 河出書房新社 『北杜夫 追悼総特集』(2012) p.34-35. 参照。
- (10) 同上 p.129-130 参照。
- (11) サマセット・モーム (William Somerset Maugham, 1874-1965) イギリスの小説家。画家ゴーギャンをモデルして、書いた『月と 6 ペンス』は、夢と現実を意味するタイトルである。このほか『人間の絆』が有名である。
- (12) 1969 年 7 月 20 日、アメリカの人工衛星アポロ 11 号のアームストロングとオルドリン両飛行士が月面着陸に成功した。
- (13) 北杜夫『青年茂吉 「赤光」「あらたま」時代』p.38 参照。
- (14) 乃木希典は、日露戦争において、二〇三高地を攻め落とすときの将軍である。旅順にある二〇三高地からは、旅順港が見下ろせることから、この要衝を攻め落とせるかどうか、重要な戦いとなった。一方、旅順港入り口部分を、軍艦を沈めて閉鎖させる作戦も進められた (この作戦に広瀬中佐が活躍した)。多くの犠牲者を出したが、この戦いに勝ち、日露戦争を勝利に導いた。日本の勝利が決まり、乃木大将とロシア軍将軍ステッセルとの会見が、水師營で開かれた。今日でも、旅順のこの現場を訪れる観光客がある。
- (15) 斎藤由香『猛女とよばれた淑女』新潮社 (2008) p.14. 参照。
- (16) 北杜夫『母の影』新潮社 (1994) p.24-25 参照。ダンスホール事件は、昭和 8 年 11 月 8 日の新聞に掲載されたもので、銀座ダンスホールの教師が、常連の有閑マダム、令嬢、女給、芸者など顧客にして、みだらな行為をしているとのことで、警視庁に逮捕された事件である。このことから、茂吉は激怒して輝子を追い出し、二人は別居生活に入った。
- (17) 北杜夫『母の影』新潮社 (1994) p.91-94 参照。
- (18) 廣澤虎造 (1899-1964) は、浪曲師で「清水次郎長伝」が売れて、独自の節回しの、いわゆる「虎造節」が一世を風靡した。とくに「石松三十石船」は有名であった。
- (19) 田端麦彦 (1928-2008) 作家。慶応義塾大学経済学部卒。佐藤愛子と結婚したが、事業に失敗し、その後離婚。「文芸首都」同人で、北杜夫などと親交があった。
- (20) 佐藤愛子は小説家。佐藤紅緑と女優三笠万里子と

の次女。異母兄はサトウ・ハチロウ。甲南高女卒。「文芸首都」同人。1969年『戦いすんで日が暮れて』で直木賞受賞。遠藤周作は、灘中時代に甲南高女に通う佐藤愛子が、みんなのマドンナのようであったと述べている。

- (21) なだいなだはペンネームで、本名堀内秀(1926-2013)、慶応義塾大学医学部卒。北杜夫とは麻布中学、慶応医局で後輩であり、文学においても同人雑誌の仲間として長い付き合いがあった。
- (22) 日沼倫太郎(1925-1968) 文芸評論家。日本電電公社に勤めながら、文芸評論を務めた。
- (23) 1958年設立、National Aeronautics and Space Administration の略。アメリカ合衆国政府内における宇宙開発に関する計画を担当する連邦機関。
- (24) 北杜夫『どくとのマンボウ途中下車』p.184. 参照。
- (25) 奥野健男(1926-1997) 文芸評論家、多摩美術大学名誉教授。麻布中学時代から吉行淳之助、北杜夫と親交があった。東京工業大学化学専攻卒。東芝入社。特許庁長官賞を受賞。現代評論分野で著書多数。
- (26) 保高德蔵(1889-1971) は、早稲田大学卒業。新聞記者などを経て文芸首都社主幹。文学を志す若者を指導した。
- (27) 宮脇俊三(1926-2003) 編集者、紀行作家。元中央公論社常務取締役。地理、歴史に深い教養に裏打ちされたユーモアあふれる紀行文には、多くのファンがいる。旧成蹊高校卒、東京大学理学部地質学科卒、同大学文学部西洋史学科卒。親友に北杜夫がいる。
- (28) 斎藤茂太『精神科医三代』p.118-167. 参照。
- (29) 河出書房新社『北杜夫 追悼総特集』で、斎藤章二氏は叔父の病気について、世間に知らしめた功績を評価している。躁鬱病に対する社会的偏見が無くなり、理解が進むようになった p.98-99 参照。
- (30) 長岡智寿子「成人教育・生涯教育におけるジェンダー — 社会参加を促進する学習活動として」、菅野琴、西村幹子、長岡智寿子編著『ジェンダーと国際教育開発 — 課題と挑戦』福村出版(2012) p.202. 参照。

## 参考文献

### 小説

- 1) 北杜夫. 夜と霧の隅で. 新潮文庫. 1963.
- 2) 北杜夫. 幽霊. 新潮文庫. 1965.
- 3) 北杜夫. 輝ける碧き空の下で. 第一部(上),(下).

新潮文庫. 1982.

- 4) 北杜夫. 輝ける碧き空の下で. 第二部. 新潮社. 1986.
- 5) 北杜夫. 母の影. 新潮文庫. 1997.
- 6) 北杜夫. 楡家の人びと. 第一部, 第二部, 第三部. 新潮文庫. 2011.
- 7) 北杜夫. 巴里茫茫. 新潮社. 2011.
- 8) 北杜夫. 白きたおやかな峰. 河出文庫. 2012.

### エッセイ、評論など

- 9) 北杜夫. 南太平洋ひるね旅. 新潮社. 1962.
- 10) 北杜夫. どくとのマンボウ航海記. 新潮文庫. 1965.
- 11) 北杜夫. どくとのマンボウ昆虫記. 新潮文庫. 1966.
- 12) 北杜夫. 月と10セント マンボウ赤毛布米国旅行記. 朝日新聞社. 1971.
- 13) 北杜夫. どくとのマンボウ途中下車. 中公文庫. 1973.
- 14) 北杜夫. どくとのマンボウ追想記. 中央公論社. 1976.
- 15) 北杜夫. マンボウ雑学記. 岩波新書. 1981.
- 16) 北杜夫. マンボウ夢遊郷. 文春文庫. 1984.
- 17) 北杜夫. 或る青春の日記. 中央公論社. 1984.
- 18) 北杜夫. どくとのマンボウ医局記. 中央公論社. 1993.
- 19) 北杜夫. どくとのマンボウ青春記. 新潮文庫. 2000.
- 20) 北杜夫. 青年茂吉 「赤光」「あらたま」時代. 岩波現代文庫. 2001.
- 21) 北杜夫. マンボウ恐妻記. 新潮文庫. 2005.
- 22) 北杜夫. マンボウ阪神狂時代. 新潮文庫. 2006.
- 23) 北杜夫. どくとのマンボウ回想記. 日本経済新聞出版社. 2007.
- 24) 北杜夫. マンボウ家の思い出旅行. 実業之日本社. 2010.

### 共著

- 25) 斎藤茂太, 北杜夫. この父にして. 毎日新聞社. 1976.
- 26) 斎藤輝子, 北杜夫. 快妻オバサマVS躁児マンボウ. 文芸春秋社. 1977.
- 27) 辻邦生, 北杜夫. 若き日の友情. 新潮文庫. 2012.

### 兄と長女の作品

- 28) 斎藤茂太. 快妻物語. 文芸春秋社. 1966.
- 29) 斎藤茂太. 精神科医三代. 中公新書. 1971.
- 30) 斎藤茂太. 茂吉の周辺. 毎日新聞社. 1973.
- 31) 斎藤由香. 猛女とよばれた淑女. 新潮社. 2008.

### その他

- 32) 蛭川幸茂. 落伍教師. 中林出版. 1967.
- 33) トーマス・マン, 望月市恵訳. ブッデンブローグ  
家の人びと. 上, 中, 下. 岩波文庫. 1969.
- 34) 辻邦生. 背教者ユリアヌス. 中央公論社. 1972.
- 35) 別冊新評. 北杜夫の世界. 新評社. 1975.
- 36) 辻邦生. 西行花伝. 新潮社. 1995.
- 37) 辻邦生. のちの思いに. 日本経済新聞社. 1999.
- 38) 阿刀田高. ユーモア革命. 文芸新書. 2001.
- 39) 菅野琴, 西村幹子, 長岡智寿子. ジェンダーと国  
際教育開発—課題と挑戦. 福村出版. 2012.
- 40) 文芸別冊. 北杜夫 どくとるマンボウ文学館. 河  
出書房新社. 2012.
- 41) トーマス・マン, 高橋義孝訳. トニオ・クレーゲ  
ル. 新潮文庫. 2014.